

1 外国語活動の改訂のポイント

- 中学年の外国語活動も高学年・中学校・高等学校と続く外国語科との結び付きを強めるため、小・中・高等学校の目標・内容に一貫性を持たせている。
- これまでは、活動が「事実のやり取り」で終わることが多かったが、それに加えて「相手に配慮したり」、「自分の考えを伝えたり」、相手にうまく伝わるようにするために「工夫して伝える」ことなどを、目標として新たに追加している。
- 「聞くこと」、「話すこと [やり取り]」、「話すこと [発表]」の三領域を設定し、英語の目標が示されている。特に「話すこと」については、[発表]の活動に偏らず、双方向に[やり取り]する場面設定が大切になるため、より弾力的な指導ができるよう、2学年間を通した目標としている。

2 外国語活動の目標

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。
- (2) 身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。
- (3) 外国語を通して、言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

○「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは

外国語によるコミュニケーションの中で、どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのかという、物事を捉える視点や考え方であり、「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」であると考えられる。

※英語の目標及び内容の詳細については、小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編の付録6『『外国語活動・外国語の目標』の学校段階別一覧表』、付録7『『外国語の言語材料』の学校段階別一覧表』、付録8『『外国語活動・外国語の言語活動の例』の学校段階別一覧表』（P168～P171）を参照すること。

3 内容の取扱いのポイント

(1) 音声中心

外国語活動の指導においては、音声によるコミュニケーションを重視し、児童にとって身近なコミュニケーションの場面を設定すること。音声面の指導については、様々な工夫をしながら聞くことの時間を確保し、日本語とは違った英語の音声やリズムなどに十分慣れさせるとともに、単なる活動の繰り返しにならないように、コミュニケーションの目的や場面、状況等を意識した活動を通して、児童に気付かせたり考えさせたりする必要がある。

(2) 文字の指導

身の回りに英語の文字がたくさんあることに気付かせたりするなど、児童が楽しみながら文字に慣れ親しんでいくように文字を扱うことが重要である。中学年の外国語活動では、文字の名称の読み方を扱い、文字に慣れ親しませ、高学年の外国語科における文字指導との連携を意識するとともに、指導は文字の名称レベルに留めることに留意すること。また、児童が文字を読んだり、書いたりできない段階であることを踏まえ、英文だけを板書して指示するような、文字を使って行う指導とならないよう注意すること。

(3) 非言語コミュニケーションの重要性

英語に初めて触れる段階の指導については、児童が自ら理解し運用できる表現が限られているため、ジェスチャーや表情を手がかりとすることで、相手の意図をより正確に理解したり、伝えたいことをより正確に伝える助けとするなど、言葉によらないコミュニケーションの役割を理解するように指導することが大切である。

(4) 障害のある児童への配慮

例えば、外国語活動における配慮として、次のようなものが考えられる。

- ・ 音声を聞き取ることが難しい場合、外国語と日本語の音声やリズムの違いに気付くことができるよう、リズムやイントネーションを、教員が手拍子を打つ、音の強弱を手を上下に動かして表すなど配慮する。また、本時の流れが分かるように、本時の活動の流れを黒板に記載しておくなど配慮する。

4 授業づくりのポイント

(1) 学級担任の必要性

コミュニケーションに対する積極的な態度を育成するためには、児童に自分の思いを伝えたい、相手のことをもっと知りたいと思わせるような話題や活動設定が必要であり、そのためには、児童を深く理解していることが指導者に求められる。

学級担任は、児童の興味・関心や生活についてよく理解しており、児童が楽しむ活動を考えたり、児童が他教科で身に付けた知識や技能を関連付けた活動を取り入れたりするなど、効果的な学習活動を行うことができる。児童と関わり合って自ら英語に慣れ親しもうとする学級担任の姿勢こそが、児童の外国語に対する興味・関心を高める何よりも大切なきっかけ

となる。

(2) 「外国語」における言語活動について

外国語活動において、言語活動は、「実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う」活動を意味する。実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うという言語活動の中では、情報を整理しながら考えなどを形成するといった「思考力、判断力、表現力等」が活用されると同時に英語に関する「知識及び技能」が活用される。つまり、英語を用いているけれども考えや気持ちを伝え合うという要素がない活動や、英語を用いず日本語だけで情報を整理しながら考えを形成する活動は、外国語活動においては言語活動とは言い難い。発音練習や歌、英語の文字を機械的に書く活動は、「練習」である。「練習」は、言語活動を成立させるために不可欠であり重要ですが、練習だけで終わることのないように留意する必要がある。

(3) 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくり

「主体的な学び」の点からは、発達の段階に応じて、児童が興味関心を持つことのできる題材や身の回りのことから社会や世界との関わりを重視した題材を取り上げ、学習への動機付けを図ることが大切である。単元の中でコミュニケーションを行う目的・場面・状況等を明確に設定し、学習の見通しを立てたり、振り返る場面を設けることが重要である。

「対話的な学び」の点からは、単元の中で他者と情報や考えを伝え合う活動を設け、他者を尊重しながら対話を図る活動を設定したり、他者の考えに触れて自らの考えを振り返ったり深めたりするよう促すことが大切である。

「深い学び」の点からは、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等を授業の中で設定し、児童にとって必然性のある活動を効果的に取り入れ、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱が統合的に育成されるよう単元の見通しを立てて計画をすることが必要である。

以下の流れを単元や授業の中に位置付け、「主体的・対話的で深い学び」を推進することが大切である。

【コミュニケーションの目的・場面・状況等を理解し、設定する。】



【目的・場面・状況等に応じて情報や意見などのやり取りをするコミュニケーション活動の見通しを立てる。】



【対話的な学びとなる目的達成のため、具体的なコミュニケーションを行う。】



【学習のまとめと振り返りを行う。】

参考資料 「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」 文部科学省